



報 告 会

# 特 攻

平成6年5月

### 第19号

〒105 東京都港区虎ノ門  
3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊  
戦没者慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090

編集人 田 中 賢 一  
発行人 木 村 元 正



三笠宮殿下御礼拝

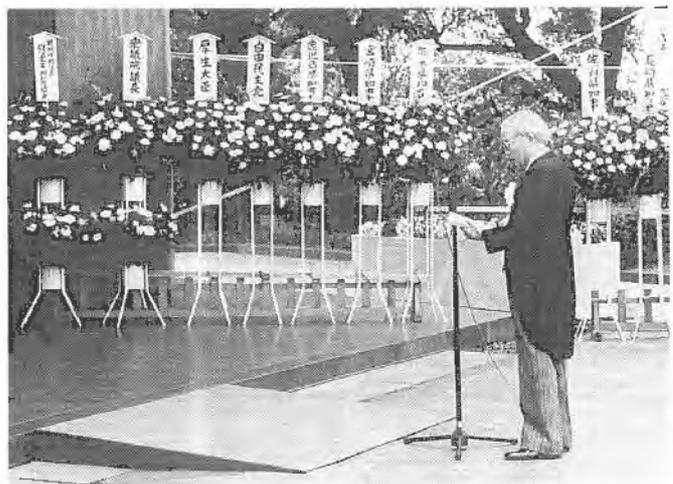
賚、遺族、会員合わせて千人に及ぶ盛況だった。来賓は三笠宮殿下のほか総理大臣、厚生大臣の各代理、伊藤茂運輸大臣、中曽根、竹下元首相、借行社、水交会の各会長、特攻隊に関係のある各戦友団体の代表、ほか心ある団体の代表など多数が参加された。

なお当初御臨席頂けることになっていた高松宮妃殿下には、お風邪を召された為欠席の止むなきに至ったこと宮家より御連絡を受けた。

午後の総会の席上多額の基金を寄付された次の方々に会長より感謝状が贈られた。大久保隆、羽山昇、森下勇、山本卓美、伊藤美夫、大徳利武

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会発足第一回の追悼式は、三笠宮崇仁親王殿下御台臨を仰ぎ千鳥淵墓苑境内を借りて、平成6年3月28日11時より行はれた。

好天に恵まれ参加者は来



瀬島会長式辞

#### 式辞抜すい

……多くの若人が同胞を思い祖国の安泰を願  
い春秋に富む身を只ひたすらに祖国に捧げ万  
に一つの生還も期せず敢然として体当たり攻  
撃を遂行し桜花の如く散華されました。その  
数陸海軍合わせて六千九百五十二柱に及んで  
おります。

……世界史に比類なきこの崇高な精神を敬  
仰しかつ子々孫々に伝えることこそわが国永  
遠の平和と民族発展のいしずえとなるものと  
確信致します。この慰霊平和祈念事業を世に  
広く推進しかつ末長く継続する為私共はこの  
事業団体を財団法人と致すべく努力して参り  
ました……………

### 遺族代表追悼の辞

第27振武隊 川村 勝 (士57期)

弟川村 成 (士61期)

全国特攻隊戦没者追悼式の挙行に際し遺族を代表し戦没者六、九五二柱の英霊に謹んで追悼の辞を奉奠いたします。

この度有志及び諸先輩の御尽力により財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が発足し、三笠宮崇仁親王殿下の御臨席を賜り、御来賓及び関係者多数の御参列を得て、この千鳥ヶ淵戦没者墓苑において追悼式が挙行され特攻の史実と遺徳を末ながく記憶にとどめ後世に伝えることができましたことは誠に感謝に堪えないところであり、深く敬意を表するものであります。

顧りますれば昭和十九年以降、苛烈な戦局のもと祖国の危急に純粋無私ひたすら日本の無窮と民族の永遠を願ひ強固な責任感と崇高な犠牲的精神をもって、空に海に或いは敵陣に決死の攻撃を敢行し桜の花の如く散華された英霊を思うとき遺族の一人としてだけでなく日本国民として痛恨の念に堪えません。

あれから半世紀、歲月は英霊の御両親を老いさせ、思いでを忘却の彼方へ押しやるうとしておりますが、特攻の必死尽忠の功績とともに次の二つの遺産を忘れてはならないと念じております。

す。

その一つは精神的遺産であります。開戦直前の日本存亡の局面において、「坐して敗るるは、国家と民族の完全なる滅亡である。戦って敗る時は必ず日本民族の精神は人々に活かされ、国家は再興するであろう。」という言葉に示されるものであります。

戦いに敗れて占領下窮乏した焦土の日本の復興は苦難の道でありました。しかし英霊の身を捨てて祖国の不滅と隆盛を願う強い意志は、共に戦った戦友の胸に刻まれ血の滲む辛苦によりこんにちの繁栄が実現され、この精神は更に私達の胸から次の世代へと脈々と引き継がれているのであります。

二つ目は社会的遺産としてのアジア諸国の抬頭であります。大東亜共栄圏という名題の適否は別として、この大戦を契機としてアジアに民族自決、独立の機運が生れこれら諸国は現在、単なる新興国ではなく注目に値する国家として発展しつつあります。これも人類の平和と幸福を念じた尊い犠牲が、人々の心に活力と誇りを与えた結果であると信じております。

私共は特攻隊の英霊の祖国愛と人類愛を改めて噛み締め、本日この追悼式の感激を胸に刻み、美しい国日本に生まれたいことを誇りとして、二十一世紀に向い歩んで行く決意であります。英霊の御加護、御教示のあらんことを願って、追悼の辞といたします。



追悼合唱森ノ木児童合唱団



陸上自衛隊東部方面隊音楽隊



会員の献花



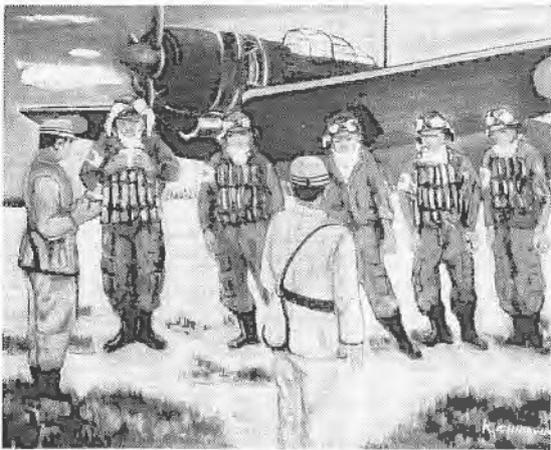
参集者献花の列は続く



献吟 吟石橋一歌 笛佐伯竜静 他



献茶の儀 表千家海老原宗陽



今回も会員の画家が特攻に因む油絵及び特攻隊員の肖像画多数を展示した。出品者は市川国雄、生田惇、伊藤直之、中野友次郎、松本武仁の諸氏。紙面の都合で2点だけここに掲載する。左「神風敷島隊」市川国雄 右「空母ペロウッドに突入する特攻機」中野友次郎



追悼式終了後 九段会館に席を移し14時から総会及び懇親会を行った。  
左下は懇親会で挨拶する竹下元首相 特操4期

特集

## 南九州航空碑

②

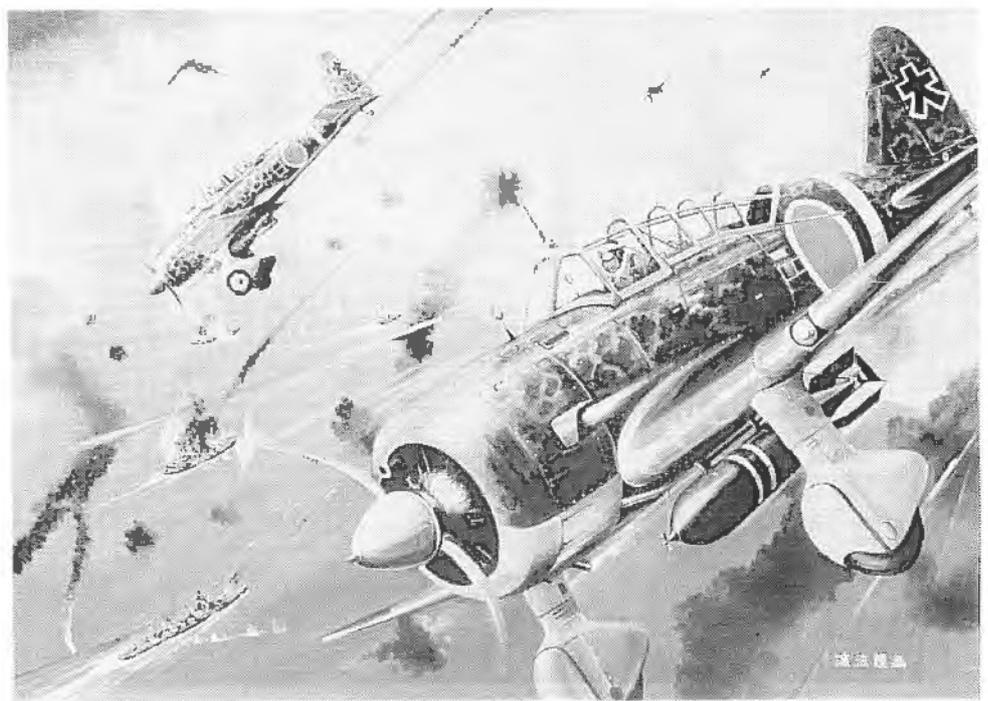
前号に続き南九州にある碑や顕彰施設を紹介する。沖縄航空作戦の特性上それらのものは殆んどが特攻碑である。

前号に南九州にあった陸海軍の航空基地の配置図を掲げておいたが、一九の飛行場のうちで一三個所は往時を物語る碑が建っている。碑だけではない、知覧、万世、鹿屋には立派な記念館があつて後世に多くのことを語り伝えていく。それについて思うことは、同じように沖縄航空戦を戦っていないが台湾に展開した第八飛行師団と第一航空艦隊については、その基地に何か記念となるものが建っているのか、寡

聞にしてそれを知らない。たとえ建てたとしても、我々日本人に未永く語りかけるものとはなり得ない。

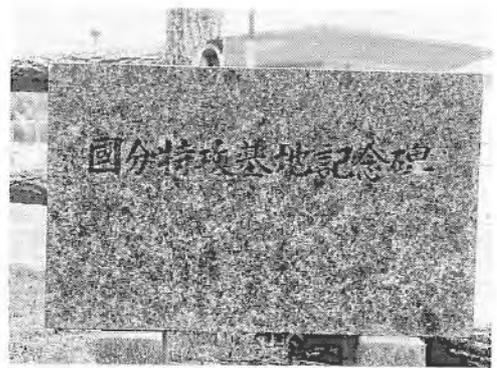
台湾本島で沖縄方面に特攻機が出撃した基地は要図の通りである。そしてこれらの基地（石垣島含む）から発進し突入した特攻隊員は海軍一二九名、陸軍二四六名と記録されている。但し第八飛行師団では中央で編成し師団所属となり台湾に向う特攻機を、新田原等で掌握し直に特攻出撃させたものもこの数字に含まれているので、台湾の基地を出撃した数字はこれよりも少ない。

3月中旬から終戦までの間沖縄方面で戦没した航空特攻隊員の数は、海軍一九八一名、陸軍一〇二一名を数える。従つてそのうちの十何%かは台湾から出撃しているが、その地に後世に伝える碑がないのは考えさせられることである。



この絵は加世田市平和祈念館（万世）に展示してある50号の油絵で、少飛会海法秀一画伯の筆になる。大刀洗陸軍飛行学校特別幹部候補生一期の「大刀飛会」が平成3年5月に寄贈したものである。

大刀洗飛行学校に昭和19年に入校した特別幹部候補生は三三〇〇人で、そのうち約三〇〇人が戦死した。万世基地から飛立った特攻隊員の中に一五名が含まれているという。



## 国分特攻基地記念碑

鹿児島県国分市  
陸上自衛隊正門前

### 碑文

この地は、大東亜戦争中の昭和十八年出水海軍航空隊国分分遣隊が設けられ翌十九年八月十五日国分海軍航空隊として開隊、連日隊員の訓練を重ねたところであったが、昭和二十年初め敵軍沖縄本土に迫る頃、海軍特別攻撃隊の基地として使用され、二百人余の若き勇士達が莞爾として雲流れる果て、遙か逝いて帰らざる壮途につき、祖国の危急に殉じた思出深い土地である。

この碑は悠久空しく散華せる、これら若人の御霊のとしえに安らかならんことを祈念し以って祖国の平和復興に資せんため、国分市及び自衛隊並びに一般有志たちの浄財と陸上自衛隊国分駐屯部隊員の労力奉仕により之を建立したものである。

昭和三十九年八月十五日

この副碑の裏面にはここから出撃戦死した特攻隊員四三四柱の氏名が刻まれている。

この碑文にある通り地元市民が中心となって建てた碑であるので、国分特攻基地記念碑保存委員会の委員長は市長がなり事務局は市役所内に設けられている。

慰霊祭は毎年4月22日に行はれ、昨年(平成5年)で三〇回を数える。

昨年の慰霊祭で委員長の谷口義一市長が捧げた慰霊の詞の一節

「顧みますれば諸御霊は先の大戦においてひたすら祖国日本の繁栄と国民の平和を念じつつ国難に



陸上自衛隊国分駐屯部隊音楽隊

散華されたことは、私ども日本国民にとって永久に忘れることのできない深い悲しみであり痛恨の極みであります”

“本年は特に十三回目の慰霊祭という節目の記念すべき年にあたり、私どもは心を新にして、明日の日本の平和と繁栄のために更に努力してまいることをお誓申上げる次第であります”

### 十三塚原特攻基地(鹿児島県溝辺町)

## 特攻の碑

現在の鹿児島空港は海軍十三塚原航空基地の跡である。空港の北方約六軒の丘の上にある上床公園内にこの碑が立っている。



この碑は昭和54年に地元の溝辺町長が中心となり、関係有志の協力によって建てられた。副碑には次の通り建立の趣旨が刻まれている。

大東亜戦争の風雲急を告げる昭和十九年十三塚原海軍航空隊(現鹿児島空港)では劣勢の戦局を挽回すべく軍民一致協力して日夜を分たぬ突貫工事もあって特攻基地を建設昭和二十年四月六日から数回に亘り沖縄周辺に迫り来る敵機動部隊に対して勇猛果敢なる体当り攻撃を敢行二百人余の若人達が眦を決して戦い雲流るる果て再び還ることのない思いを胸に決然と征途につき祖国日本の危急に殉じたのである。

即ち名古屋屋空 百里空 宇佐空など海軍航空隊の精鋭が燃ゆる血潮を君国に捧げて悠久の大義に散華した戦士の魂魄を鎮めもって祖国のとこしえの平和を希うとともに之等勇士の偉業を讃えてここに之を建立する。



慰霊祭は毎年十三塚原特攻碑保存会(会長は溝辺町長)主催で行はれ、昨年で十五回に及ぶ。

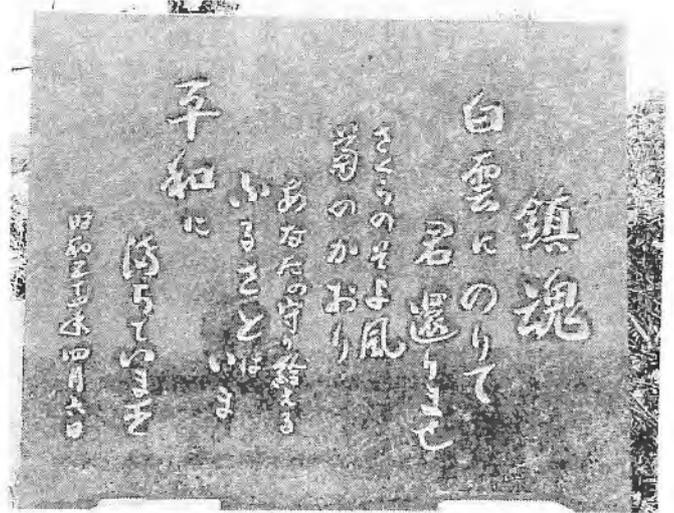
平成5年4月3日に行はれた慰霊祭で、会長である今吉衛町長の捧げた慰霊のことばの一節

「御霊は先の大戦に於いて、ひたすら祖国日本の繁栄と国民の平和を念じつつ、国難に殉じ散華されましたことは、私共日本国民にとって永久に忘れることのできない深い悲しみであり、痛恨の極みであります……」

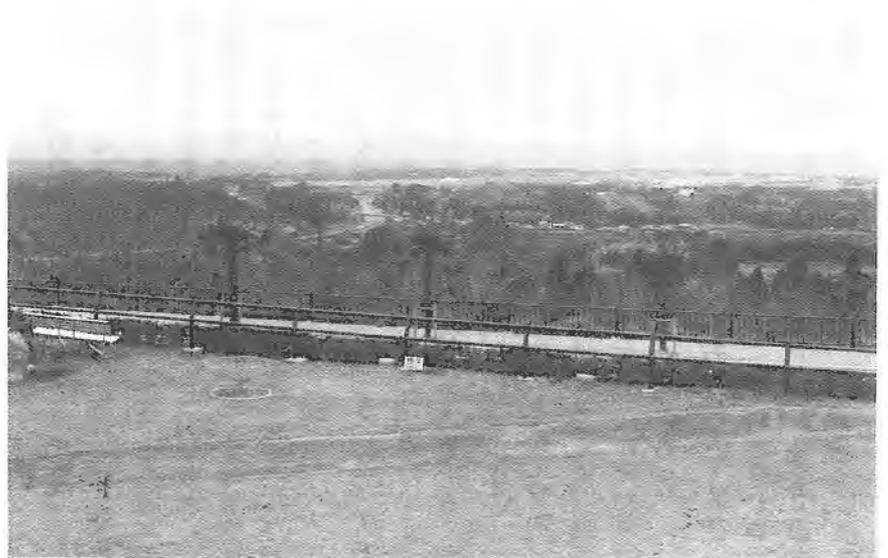




一輪の花にも心打たれるものがある



副碑の一つ



台上から空港を望む、その向うに高千穂の峰が見える。

鹿児島空港は離島への便もあるので毎日の離着陸は約125機で、年間の利用者は延600万人に及ぶ。ここがかつて特攻基地であって、二百余名の若人が帰らぬ攻撃に飛び立った処であることを知る者、果して何人あるだろうか。旅客ターミナルの窓からは高千穂の峯が真正面に見える。特攻隊員も地上で最後に眺めた祖国の山だった。



## 特攻基地第二国分の記

## 白雲にのりて

## 君還りませ

「みどりの森よ山陵の、嶺にひらけるエアポート、文化を運ぶ銀翼に、ああ大空の幸をくむ、伸びゆく溝辺わが故郷」溝辺町民歌の一節であります。

この鹿児島空港もかつて海軍航空隊第二国分基地として、純粹な祖国愛と使命感に燃えた花も蕾の若鷺達が飛び立ち散華した魂の故郷であります。このゆかりの地に特攻慰霊碑を建立し現今の日本の繁栄の礎をなした英霊を慰め、平和の尊さを語り継ぐ為に全国に募金活動を呼かけ、特攻機がかすめて南の空に飛び去ったと言はれる上床山の一角に建立できました。

この稿の表題は十三塚原特攻碑保存会が平成四年二月に発刊した本の書名であり、この文章は書物の冒頭に掲げられている委員長である今吉衛町長の「発刊のことば」の前文である。書名は副碑(前の頁に写真が掲げてある)に刻まれている詩「白雲にのりて君還りませ さくらそよ風 菊のかおり あなたの守り給えるふるさとはいま平和に満ちています」に拠るもので、

碑を建てそしてこの書物を編集した町の人々の気持ちをよく現している。

二五〇頁のこの書物の大半は遺書と遺族等の回想であるが、その中の冒頭に掲げられている時任正明(第一草薙隊名古屋空海軍少尉 予備学生出身

四月六日特攻出撃戦死 九九艦爆)の遺書に続いて姉川路貞の一文がよく特攻烈士とその肉親の心情を現しているので、ここに紙面の許す範囲で紹介する。

眼を閉じると、今も尚昨日の事のように耳許によみがえってくるあの声、あの笑い声。出撃の前夜だった。

「姉さん、いよいよ征きますよ。亡兄さんの処へ。後を頼みます。しっかりと後を頼みますよ」と何時もと少しも変わらぬ、否それよりもっと落ち着いた静かな声が、はるかに遠く受話器にひびいてきた。出撃の前夜!!それは四月五日の夜だった。廿三夜の月とて、餅をついて武運を祈る夜だった。役場の小使いさんが、真夜中急に「時任さんの国分の息子さんから電話です」と知らせて下さった。先に父が起きて行った。しばらくして「息子さんがお発ち

になるそうですから、お母さんもきて下さい」とまた小使いさんが呼びに来られ、母も行った。最後は祖母と私だった「国分の息子」何か心に解せないものがあ

いものがあり、弟からだろうかと思

い、まさか、と亦打消しつつ、月明かりの薄明るい中を、私は智子を抱き、祖母は当直の方にたすけられつつ役場まで歩いて行った。

そして、「明朝早く沖繩に出撃する」という弟の声を聞いた。真夜中の静まりかえった部屋の中に、祖母、父、母、それに私、思い思いの音が受話器にすがる。夢の中にいるような気持ち、だが夢の中の登場人物にはまだいくらかの感情がある。しかし、電話の前に並んだ私達には、感傷も感情もない。まして涙もない。只心残りなく征かしてやりたい、精一杯励ましてやりたい。その気持ちだけが、頭の中でたえず渦巻いていた。最初父がた

た。「正明か、征っておいで。家の事は何も心配いらぬよ。立派に戦っておいで。成功を祈る。決して見苦しいことのないように……」と言った父に「お父さんですか。何も思い残すことはありません。満足です」と答えたところ。次に代わってたった母に、元気のよい声で

「お母さんですか。この前、いろいろの送りもの有り難うございました。友達も皆大喜びで頂きました。今日は午後一時頃国分に着きました。明日は発

ちます。お母さん、おからだ大切に。おばあさんはお元気ですか」ちょうどその時、祖母は風邪気味で寝込んでいました。お元気ですか」と答え

「正ちゃん、いよいよ征きますか。元気で行って下さい。明日何時に発ちますか」と申しましたところ

「時間は申されません。荷物も農学校に頼んでありますから受取りに来てください」

「それではこれからすぐ行きます」

「来られても面会はできませんから、飛行機でも見送ってください」と答え

たという。心急ぐまま祖母を当直の方にお願ひして、一足先に部屋にはいた私は母と代わった。

「正ちゃんね。元気でおいきなさい。家の事は何も心配いりません。心残りなく戦ってください」

「有り難う。姉さん、明日はもちろん生還は期しません。義人兄さん(在満州)、良子姉さん(青島)も遠く、傍に居るのは姉さんだけです。万一のときは、おばあさん、お父さん、お母さんを頼みますよ。しっかりと後を頼みますよ」

「大丈夫、大丈夫」父も母も、私も、他の言葉を忘れたもののように、同じ言葉だけを繰り返していた。

当直の人に手を引かれ、祖母もやっと

辿り着いた。七十を越して、足元もおぼつかなくなつた祖母は、母に支えられて電話の前に進んだ。父が傍らから

「おばあさん、これが正明の最後の電話ですよ。よく聞いておきなさい。涙声を出さないように……」と言った。吾と吾が心を支えるように、祖母は生まれて初めての受話器をとった。

「正ちゃん。明日は発ちますか。行つておいで。そして元気で帰つておいで」と。そして後は「ウウ……」となるような声になった。それに答えた弟の言葉を私は知らない。父が「おばあさん、もういいですよ」と代わつた。

七十有余年昔風に育ち、陛下への忠義」という事を無上の光栄と信じ込んできた祖母は、いつかは征かねばならぬという事は、常に私たちから聞かされ、覚悟はできていた筈、そしいよいよ明日発つという今、精一杯励ましてはみたものの、廿余年育んだ、断ち難い孫への愛情は、叶わぬ望みと知りながら「元気で帰つておいで」の一語に万感を託した。年老いた祖母のこゝとばをどうして女々しいといえよう。「それでこそおばあさんです」と、かえつてその心を労わつてあげたい様な気持ちにおそわれた。

その祖母も逝つた。孫たちを心底か

ら可愛がつてくれた祖母だった。当時私は生後四カ月近くの長女を抱いていた。

昭和十五年一月一日中支通城の戦野に、頭部貫通で兄(智三人)を失った私達は、生まれた子に兄の一字「智」をもらい「トモ子」と名付けて、それを弟に便りした時「何で僕の名をとらなかつた。正子とでも、明子とでも」と返事をよこした。生まれて一度も見ることのない叔父さんにこの声を聞かしてやりたいと「正ちゃん。智子も連れてきますよ」

「そう、智子の声を聞かしてほしいな」

「だってよく眠っているんですもの」

「何だ。鼻でもなんでもつまみ上げてごらんよ」

「あーそうね」

あわてて、母に智子の鼻をつまみ上げてもらった。無心に眠っていた児はワツを泣き声をあげた。それを電話近く寄せると、

「オウ、元気な子だなアハハ……」と何の屈託もなさそうに笑った。この笑い声が今も耳底深く残って、折にふれ私を涙ぐませる。

落ち着いた声だった。静かな声だった。明日出撃し南海の空に散るとも思えぬ明るい声だった。これが本当に弟

だろうか。二つ違いでいつも仲良くしたり、けんかしたりしていた弟だろうか。面白いことばかり言つて周囲の人達を抱腹絶倒させていた弟だろうか。

皇国の御楯として何時の間にかこんなにも遅く、立派に成長してくれたのだらう。もはや私達の手の届かない処の境地に達してしまっている。国を護り、国の御楯として立つ人達は、この

若さでこんなにも達観できるものか。あれが朝夕身近かく起き伏していた弟だったのだろうか。私は心の中でここ二、三年、私達の知らぬ間に、こんなにも立派に育つてくれた弟に、何か近寄り難い気持ちさえ抱かされた。

弟の声でありながら、既に弟ではなかつた。国を愛し、皇国の不滅を信じて立つ人達、すべての心を併せた声だった。人間界を遠く離れた神の声だった。その声の明るさが、かえつて私達を力づけてくれたのかも知れない。

「それではお父さん、大分長くなりましたから、これでお別れいたしましう」

「では、お父さんも、お母さんもすぐ行くよ」

それで電話はきれた。静まり帰つた部屋に、シーンとした一瞬の沈黙。

(以下略)

(以下略)

## 特攻碑の紹介について

我が会が公益法人として発足することになりましたので、それにふさわしい活動を従来にも増して活発に行はねばならないところであります。一言に慰霊顕彰と申しますが、生き残つた者が集つて慰霊祭をやっているだけでは年寄りの自己満足に過ぎません。特攻隊で戦死した人達の精神を語り伝えることが肝要であつて、それが慰霊の最大なもの信じます。

金石に刻して建て、おくことは我々が死んだ後も後世に語り伝える有力な手がかりとなります。そのような意味で前号から南九州にある航空碑を集として紹介して参りました。これらは殆んどが特攻碑でして、平成二年に出した「特別攻撃隊」に掲載済のものであります。その大部が地元の人々が建てた元市の町村が主催して毎年慰霊祭を行っていることが特筆大書に価すると思ひ、ここに重ねて紹介した次第であります。航空以外の特攻碑で地元市町村が護持しているものがありましたらお知らせ下さい。

# 万世特攻碑

## 碑文

昭和十九年、太平洋戦争の戦局はとみに悪化し、すでに決定的段階を迎えんとしていた。ここ加世田市吹上浜の地に、戦勢転換の神機を期すべく地元学徒ら軍民一致の協力によって、本土防衛沖繩決戦の基地万世飛行場が建設された。

昭和二十年三月二十八日より終戦に至るまで、陸軍特別攻撃隊振武隊の諸隊、飛行第十六戦隊、飛行第五十五戦隊の若き勇士達は祖国護持の礎たらんと、この地より雲表の彼方へと飛立った。一機また一機と。征きて帰らざる者あまた。或は空中に散華。或は自爆。壮烈にして非絶。その殉国の至誠は鬼神もこれに哭するであらう。

終戦以来幾星霜、ここに祖国はその輝かしき復興をとげた。われわれ生き残りたるものと心ある人々は、英霊の魂魄を鎮め、その偉勲を讃えんが為に、ここにこれを建立する

昭和四十七年五月二十九日



この碑には万世を出撃戦死した特攻振武隊隊員一二〇柱の氏名が出撃日の順に刻まれている。

部隊名は第62、63、64、66、72、74、75、102、104、141、432、433の各振武隊で、出撃日は20年4月3、6、7、12、16、28日、5月2、4、25、27、28日、6月1、7、8、11、19日となっている。



正面にあるのが加世田市平和祈念館

# 第23回慰霊祭 平成5年5月23日

## 万世特攻慰霊碑奉賛会



奉賛会松山賢太郎会長の

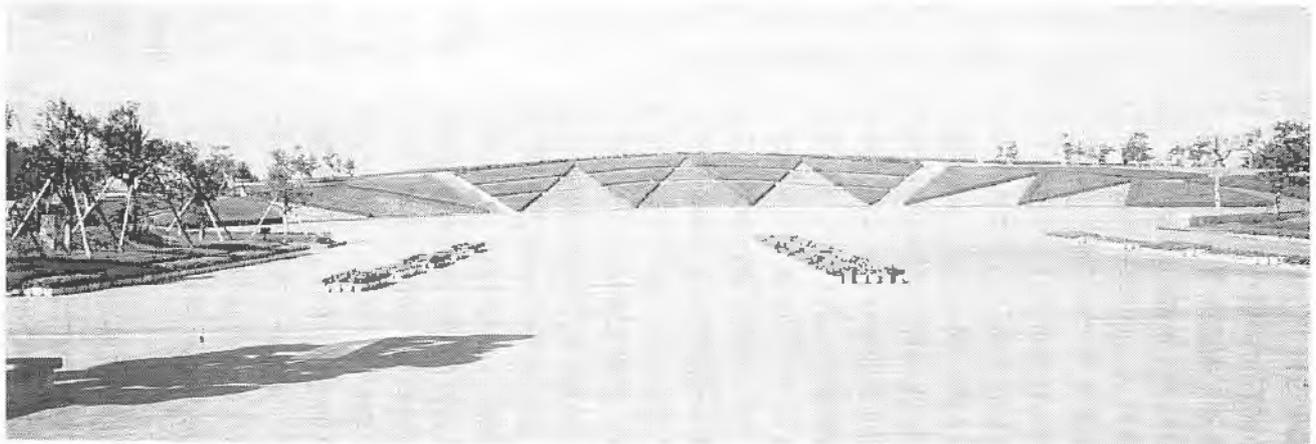
追悼の言葉の一節

“ちぎれる程に打ち振られる旗の波、歓呼の声に送られて、祖国存亡に身を挺し、住み慣れた故郷の父母肉親との惜別をも超越して、ただひたすらに「祖国のために」を合言葉に、若き純心な使命感とほどばしる青春の情熱を特別攻撃隊という世界の戦史上例を見ない作戦にかたむけ、愛機の轟音とともにこの地を飛び立っていったみな様方の御心境を思うとき、悲痛ただただ断腸の念を禁じ得ません。

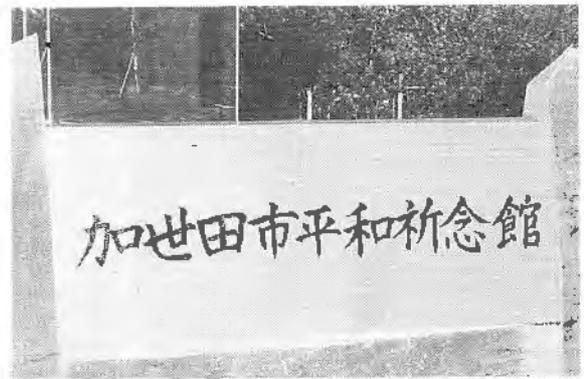
汗にまみれたありし日のお姿を偲び、哀悼の涙を新にするものであります”  
“……しかし、我が国では戦争を知らない世代への交代が戦争体験の風化をもたらしつつあり、戦争がまるで他人ごとのように平和を謳歌している今でこそ、私たちは過去の貴重な体験を忘れることなく、今日の日本の平和と繁栄の礎が、ひとえに皆様方の崇高な犠牲によって培はれたものであることを肝に銘じ、尊い生命を祖国のため捧げられたみな様方の心情を正しく後世に語り継ぐことが、残された私たちの責務であり、散華されたみなさま方の御遺徳に応えるただ一つの道であると新しい思いをいたしております。



飛行場建設工事殉職者をはじめとし特攻作戦以外の戦死者を祀る慰霊碑

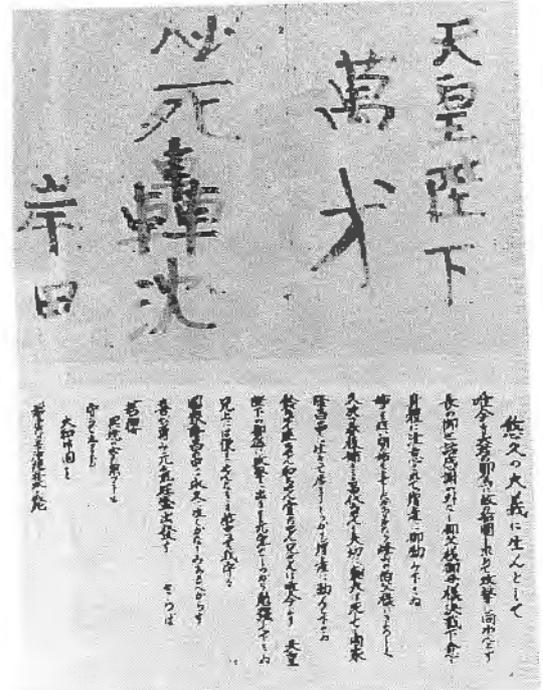
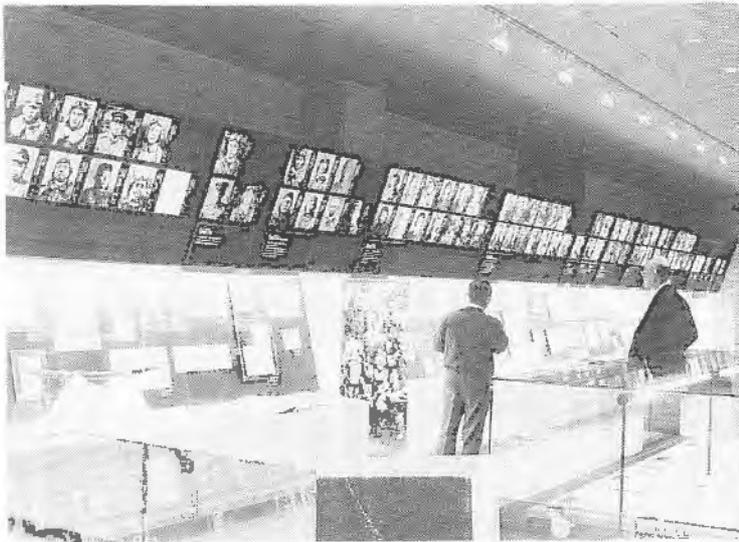


かつて滑走路のあった一帯は広々とした公園になっている



前頁奉賛会長追悼の言葉  
の続き

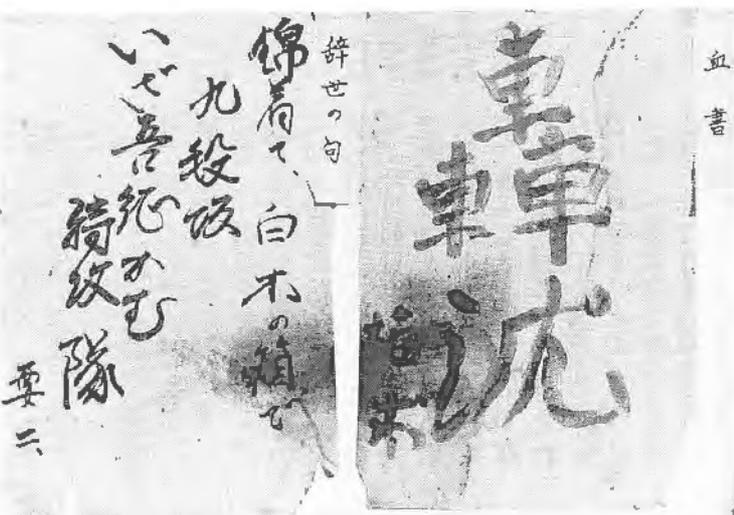
“……その一助といたしましても、ゆかりの深いこの地に万世特攻遺品館を建立すべく、奉賛会といたしました。も、今日まで全国の皆様のご協力をいただきながら全力で取り組んでまいりました。この永年の悲願が、加世田市当局の絶大な御支援をいただき、本日「加世田市平和祈念館」としてみなさま方の最後の地となったこの地に、立派に完成しましたことを、ここに謹んで報告申し上げます”



64振武隊岸田盛夫伍長の血書と遺書

館内展示資料の一端

加世田駅前坂下写真館主 坂下重雄氏(故人)が梅村要二伍長の父興一郎氏に出した五月二十一日付けの手紙  
御葉書拝見致しました。有難いやら勿体なさで只胸中熱いものがこみ上げて何とも申述べようが御座いません。大東亜建設世界平和の為、敢然



75振武隊梅村要二伍長の血書と辞世の句

笑って死地におもむかれた御令息要二様の霊に対し合掌致し、御冥福をお祈り致すばかりで御座います。

忘れも致しません、去る四月十一日午後四時頃だったと思います。御令息他六人の勇しい飛行服姿で「オイ冥土の土産に写真写して行こうかね」と仰しやうて、如何にもお元気なお声で小生宅の玄関にお見えになりましたので、こころよく二階写真室に御案内申上げました処、初めて小野田様をお写し申上げました。そのとき梅村様が「オジサンしっかり写して下さいね、それから僕の分は葬式用の伸写真迄一枚是非頼みます。そしてうち迄送って下さい」とはっきり仰しやいました。小生は黒い布をかぶりピントを合わせながら涙がこみ上げて仕方がなかった事を今でもハッキリ覚えております。私も〇〇隊のお方はほんの最初から写しますが、相当沢山写して上げましたが葬式用の写真までと仰しやったお方は、お宅の要二様お一人で御座います。あの時余程確い決心で何ら心おきなく御立ちになった御事と存じます。(以下略)

# 芙蓉之塔

鹿児島県曾於郡大隅町八合原

岩川飛行場跡



## 碑文

平和と文化の光輝く岩川台地は三十余年前まで雑木林に囲まれた畑や牧草地であったが、太平洋戦争末期本土決戦に備えるべくこの台地は日本海軍により航空基地として整備された。昭和二十年三月米軍が沖縄に迫り、この迎撃は楠公湊川決戦にちなみ菊水作戦と呼ばれて、陸海航空全力三千機が主として九州各地に展開して十五回にわたり総攻撃が敢行された。

海軍芙蓉部隊は戦闘八〇四・八三二・九〇一の三個飛行隊を結集し静岡県藤枝において夜襲部隊として編成され三月末鹿屋に進出、次いで岩川基地に移駐した。菊水攻撃の嵐の中にあつて艦船・飛行場の夜間銃爆撃制圧、攻撃隊の誘導等きわめて困難な任務を遂行した。予備学生、予科練を含めた青少年たちは戦いかつ激しい訓練を重ね青春の花も知らず同胞沖縄の救援に出撃した。

飛行隊長川畑少佐他八十余名の英魂が南海に散つたが遂に敗戦を迎えたのである。

高千穂の峰を護りて散りし吾子

永久に安かれ山影あかし

背の君は南に消えて若き妻

日向の国なか山路けわし



## 鹿屋護国神社にある 飛行第九十八戦隊戦没者之霊



## 宮崎特攻基地慰霊碑



## 宮崎空港北端

元赤江飛行場

航空隊西門

## 碑文

この地は「旧海軍赤江飛行場宮崎海軍航空隊跡地」である。

昭和二十年八月十五日の終戦にいたるまで日本防衛の南九州最大の航空基地として陸海軍共同作戦を含む数多くの戦闘作戦に特別攻撃隊及び雷撃隊出撃の基地となつて大東亜戦の戦史に残る偉跡の地である。

私共

現在平和と繁栄の生活を享受しております。然しこの平和と繁栄の陰には大戦中における数多くの国民の犠牲と数百万の戦死戦没戦傷病者、多数の国民の困苦欠乏のあったことを忘れてはならない。なかでも特に祖国の悠久の平和と最後の勝利を信じて、「祖国のために」を合言葉に南海の空で散つた陸海軍特別攻撃隊員たちの崇高なる精神と遺徳は永く後世に伝承したい。

赤江飛行場は昭和十八年十二月一日付で海軍航空隊の練習基地として開隊、昭和十九年七月赤江基地は練習基地から第一線の作戦基地への編成方針が打ち出され正式に作戦基地として開隊したのは、昭和十九年十月十日である。

昭和十九年十月十二日台湾沖航空戦に突入した。当日赤江基地に展開していた陸海軍機の攻撃隊及び雷撃隊の出撃となった。赤江基地を主軸として発進又は中継基地として作戦に参加した海軍機は、「一式陸上攻撃機」をはじめ三四四機、陸軍機は飛龍等二〇〇機、総機数五四四機である。

この作戦による戦死者数は海軍六三五名、陸軍八〇名である。

戦局はこの作戦終結とともに勝機が空しく去つた。一死これが戦局の好転をもたらすとは思はない。徒死を待つより大空に散るを潔よしとする特別攻撃隊にすべてを托し国に報ゆる信念に燃える陸海の若鷲は愛機とともに敵空母に体当たり攻撃を敢行した。それは総力をあげて比島レイテ湾に突入する帝国連合艦隊に悲運の翼なき第一航空艦隊送る最後のはなむけであった。

昭和十九年十月二十五日第一神風特別攻撃隊敷島隊の第一陣である。海軍における神風特別攻撃隊として出撃した特攻隊員は布告第五十九号を始め布告第二五九号を最後に二、五〇七名になる。陸軍における特別攻撃隊として出撃した特攻隊員は一、三九二名になる。特別攻撃隊の隊員のほとんどがこの赤江基地を飛びたち直接攻撃に参加したものの、或いは中継基地として比島、台湾、沖縄で特攻作戦に参加し、我が身命を捧げることにより愛する肉身や懐しい故郷そして祖国を救い得るならばの一念に燃え未曾有の国難に散華した特別攻撃隊員若鷲の最後の地である。

昭和二十年三月十八日宮崎初空襲である。米艦載機による銃撃は午前五時四十八分夜戦一機の銃撃に始まり午前八時までグラマン戦闘機延五四〇機、正午より午後四時四十分まで延二〇〇機、これを反撃したのが、第七二二航空隊の戦闘三〇六、三〇七両飛行隊の「零戦」九〇機である。

この初空襲以後の宮崎空襲における民間人の人的被害は死亡一二三名、負傷者一七六名である。

今大東亜戦争において、有能な人材を失つた戦争の責任は大きい。

合祀部隊名 (宮崎基地関係)

- 第三四一航空隊 402飛行隊
- 第七六二航空隊 406、405、501、262飛行隊
- 第六〇一航空隊
- 第七二一航空隊 708、306、307、711飛行隊
- 飛行第七戦隊 (陸軍)
- 飛行第九八戦隊 (陸軍)
- 第三四三航空隊 401飛行隊
- 第八〇一航空隊 703飛行隊
- 第七〇一航空隊 103、106飛行隊



海軍一等飛行兵曹

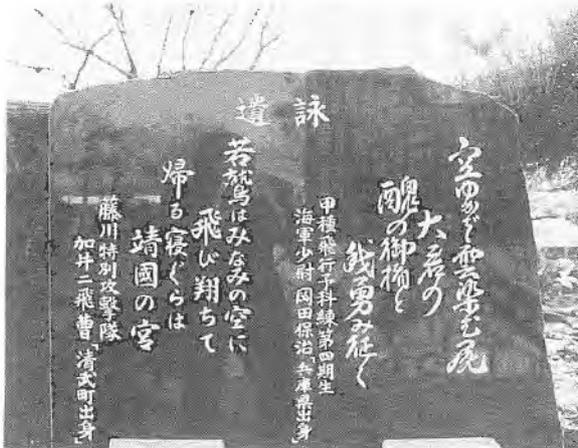
伊東 勲

何も書くことはありません。只御両親様及久美子の健在を祈るのみ、勲は決して人におくれはとりません。潔よく散るのみです。目標は正規空母です。十日位したら徳島海軍航空隊第十四分隊五班上野功君に便りして下さい。写真は無事受取ったと泣かずにはめて下さい。幸多かれと祈るなり。親戚の皆様へ宜敷く

宮崎航空基地にて六時三十分終了

御両親様 孝養頼むぞ久美子 安よ頑張れ

(神風特攻第六菊水隊 二十歳)



(遺詠)

身はたとえ嵐の叫ぶ南と  
雲染む屍と散りぬとも  
咲く勲の香り止めて  
伊東 勲 (十九歳)

みんなみのの雲染む果に  
散らんとも  
くにの野花とわれは咲  
きたし  
高崎文雄 (十九歳)

(回想)

特攻兵の望の花の技持ち  
て  
駆けつけ来れば機は飛  
び立ちぬ  
旧航空隊勤務 安田  
いく子

(遺詠)

空ゆかて雲染む屍大君の  
醜の御楯と我勇み征く  
海軍少尉 岡田保治  
若鷺はみなみの空に  
飛び翔ちて  
帰る寝ぐらは靖国の宮  
加井二飛曹



南国の光を浴びて華やかな宮崎空港。旅客ターミナルの向って左の方に貨物ターミナルがある。そのまた先の道が行き止りになっている処にこの碑があるが、乗降客は知る由もない。

若桜の蕾のまま献身無私の先輩同期そして後輩の崇高な精神を今再び結び合い白砂青松の海岸線、無限に広がる紺碧の赤江灘と青い空は今もなお美しい姿を留めているこの地に無量の感をもって当時を偲び我々同志合集い宮崎県民及び全国の有志の浄財によって碑を建立し愛国の赤誠に殉じた友たち、宮崎大空襲における民間犠牲者の鎮魂と世界恒久の平和と旅する者の空の安全の祈りをこめて民間航空の殉職者の霊を合祀し忘れ去らんとする先人の偉業を顕彰し永く後世に伝え希うためゆかりのこの地に碑を建立し碑名を「鎮魂之碑」と銘記しここに碑を捧ぐ

昭和五十八年三月吉日

宮崎特攻基地慰霊碑建立期成同盟会一同

# 川南護国神社例祭

## 宮崎県児湯郡川南町

この地はかつて陸軍挺進部隊の基地のあった処で、戦後建立された護国神社には、同町出身の戦死者だけでなく陸軍挺進部隊一万余の英霊も合祀されている。毎年11月23日には町長が祭主となって例大祭が行はれ、挺進部隊の戦友も全国から参加している。



### 戦友の捧げた歌

朝日に映ゆる日向灘 翠巒清し尾鈴山  
降臨給いし神々の歩みし跡をしいつつ  
真白きバラの花模様 ああ神兵は天下る  
夏草繁げる唐瀬原 銃声響く桃源郷  
大詔拝す南進の 喊声揚がり腕を撫す  
称う挺進殉国は これぞ我等が合言葉  
マラッカの海雲晴れて 赤道を越す大編隊  
忽ち降すパレンバン 白人撰取の大牙城  
天覧賜う宇都宮 下野の空に五百余の  
花は開けど唯一つ

君が御馬前に流れ散る

戦局やがて傾きて ひたすら練武の二年半  
感みは深し小丸川 古き碑 語るあり

レイテは伝う天王山

高千穂の名負う二千の士

大厦は既に傾きて 一臂支うる術もなし  
翼失いし滑空隊 我遅れじと馳せ向う  
恨は尽きず雲竜や 屍を晒すルソンの野  
我が空挺の由来記の 棹尾を飾る特攻隊  
後に続くを信ずると 遺して征きし義烈の士



祭文を捧げる黒木町長

茫茫遙か半世紀 ああ青雲に花負いし  
蒼穹よりの声受けて

識して捧ぐ亡き友に

註1 昭和17年7月22日宇都宮飛行場で落下傘降

下を伴う天覧演習が行はれた。参加したのは挺進団司令部と挺進第一聯隊及び挺進飛行戦隊だったが、その際松浦軍曹が開傘で殉職した。

註2 18年6月18日挺進第四聯隊の演習部隊が、

高鍋町の北を流れている小丸川を渡渉しようとして押流され伊藤中尉以下八名が殉職した。表に「八勇士殉職之地」と刻み、裏に「今日征くか明日征くのかは知らねども今日の務に我は励まん」という歌と、八人の官氏名を彫んだ碑が、小丸川を見下す高台の通称高鍋大師という処に建っている。

註3 高千穂部隊と呼ばれた第二挺進団がフィリ

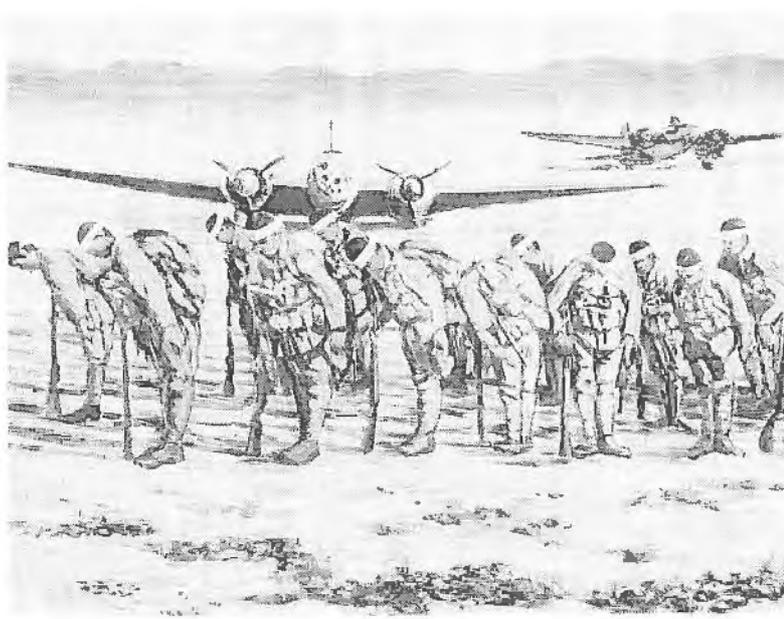
ピンに出て行った後、挺進集団司令部と滑空歩兵聯隊をはじめとし滑空機搭乗部隊がフィリピンに向った。その中で滑空歩兵第一聯隊主力、挺進工兵隊及び通信隊の各一個中隊は空母雲竜に搭乗して戦場に急いだ。19年12月19日台湾沖で敵潜水艦に沈められ千余名が戦死した。

註4 義烈空挺隊は沖繩の読谷、嘉手納両飛行場

を一時的でも制圧して航空特攻の成果を挙げる為、20年5月27日に行はれた空挺特攻部隊である。第三独立飛行隊(隊長諏訪部大尉)の重爆一二機に塔乗した奥山大尉指揮の一三六名は、健軍飛行場を発って沖繩に向った。途中四機が不時着し、八機のうち何機かは目的地に着陸し27日まで飛行場の機能を喪失させた。

### 挺進各部隊の姿を象徴する 油絵一七点を川南町に寄贈

陸軍の挺進部隊は挺進練習部を含み一五個の編制上の単位部隊があった。これに軍隊区分による義烈空挺隊と空母雲竜搭乗部隊を加えると一七個部隊になる。これらの部隊の姿を象徴的に表す油絵一七点を、今回の祭典の場で戦友一同から川南町に寄贈した。画家は特攻隊慰霊顕彰会理事の松



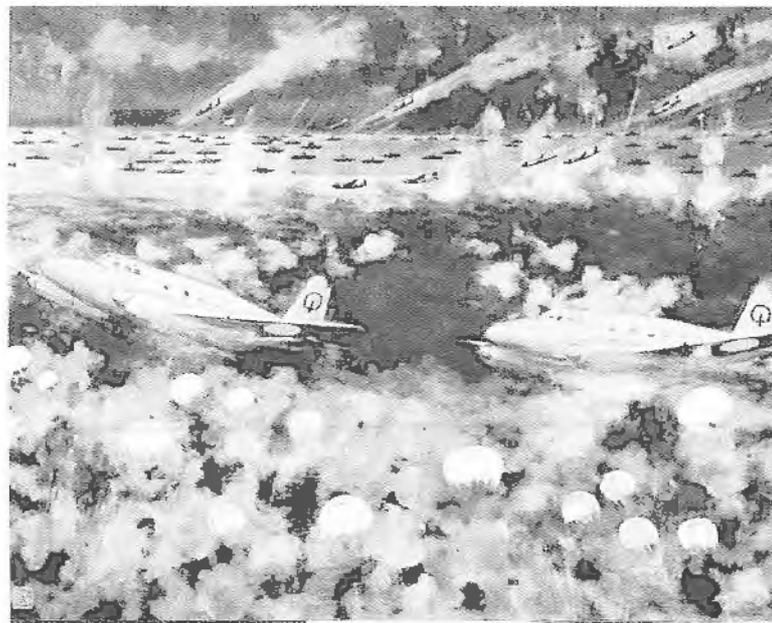
義烈空挺隊員郷里に別れを告げる

健軍飛行場出発前郷里に向って別れを告げる。

この絵は当時の写真をもとにして画かれたもの。

本武仁画伯で、大きさは20号である。

川南町では資料館が出来るまで護国神社の裏にある公民館に展示しておくことになった。これらの絵のうちで特攻隊に繋るもの二点をここに紹介する。



高千穂空挺部隊のレイテ降下

手前は対空砲火を冒してブラウエンに降下する

挺進第三聯隊長以下。遠方はドラグ及びタクロバ

ンに向う輸送機、その向うはレイテ湾に群る敵の

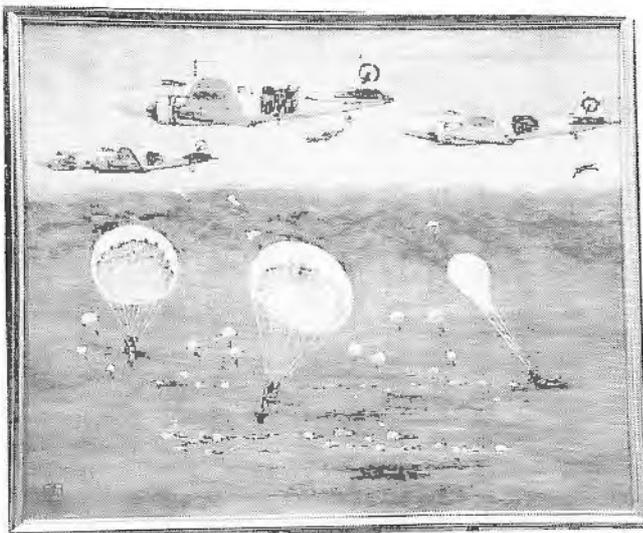
艦船。両目標に向う部隊はたとえ降着に成功して

も友軍と提繋できる見込は初めからなかった。

川南護国神社奉賛会長である

黒木川南町長の捧げた祭文の一節

「かつて軍隊や戦地で生死をかけて苦楽を共にされた戦友の方々や、町内はもとより全国各地から多数の方々がはるばると御参集頂き、ご英霊に追悼の誠を捧げ在りし日のご雄姿を偲びながらご遺徳を讃え尽きぬ思出を語り合いますことはまことに感慨一入であります。又今年は今日本空挺同志会より落下傘部隊関係の豪華な戦記絵画を多数奉納されました。引きつづき郷土出身のご英霊ゆかりの大作をも奉納される由承っております。何とぞ往時をしのびご覧賜りますれば無上の喜と致すところでございます。」



これも奉納した絵のうちの一つで「陸軍挺進練習部の練習員降下訓練」と題するもの。この護国神社の西方ほど遠くない処にかつて広大な降下場があった。

## 特攻随想 (第四話)

評議員 上坂 康

### 第三話の反響

平成六年正月に茂木明治氏(海兵68期)から頂いた年賀状に、特攻第十八号の「特攻随想」を読んで、以前に藤村義郎氏(海兵55期、終戦時のスイス駐在海軍武官)から聞いた「英国は戦闘機の体当たり特攻をもって、バトル・オブ・ブリテン(一九四〇年)におけるドイツの大空襲を撃退した」という話の真相を知ることができたと書いてあった。

これによって、旧海軍軍人の間に、英戦闘機がドイツ機に対して特攻攻撃を敢行したと思っている人がいるのは、藤村氏がその情報源だったのではなからうかと想像された。平成四年に他界された藤村氏は、スイスのベルンにあった米戦略局欧州本部のアレン・ダレス部長とともに「ソ連参戦前の日本終戦工作」を図り、何度も東京に請訓の打電をしたが、米内光政海軍大臣らが米国の謀略と見て、これを黙殺したという有名な話の主人公である。戦後も実業界で活躍された藤村氏は、旧

海軍軍人の間にはかなりの影響力を持つ人物であったようである。

このほか「特攻随想第三話」の内容について、数人の読者から「英国は絶対に特攻をしないとかが本当であろうか」とか「イタリアやイギリスにも人間魚雷があったのではないか」という質問の電話をいただいた。

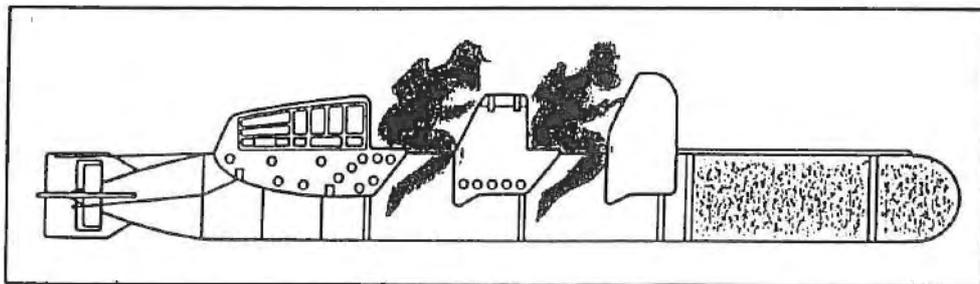
### 決死と必死

その電話の際にも話題になったが、現在、世界各国の特攻的兵器を最も簡明に解説しているのは、英国人リチャード・オネール著、益田善雄訳の「特別攻撃隊」(霞出版社刊)である。本年一月十六日、私はこの本の訳者・益田善雄氏(海兵73期)に電話して、前記の読者からの質問についてご意見をお伺いした。

その際、同氏のご好意で同書からの転載を認めていただいたのが、ここに掲げてある英海軍のチャリオット有人魚雷である。これはイタリアのマイアル有人魚雷(元祖は第一次大戦中から使用された)にならって一九四二年ころ試作され実用されたものである。

この最大速度四ノット(七・四km/

時)、安全潜水深度一〇・七m、航続距離三ノットで三三km、頭部炸薬三一八kgの魚雷を、二重のゴム製潜水服を着て水中呼吸器を装着した二名の乗員が操縦する。それらの乗員は目標を攻撃する前に離脱し帰還するか、それが不可能な場合は捕虜になることになっ



英海軍のチャリオット有人魚雷。頭部炸薬318kg。

ていたのである。

すなわち、益田氏が翻訳し分けしておられるように、イタリアやイギリスのは「有人魚雷」であって、体当たり玉砕する真の特攻兵器、日本の「人間魚雷」(回天)とは違っているのである。この著者オネール氏は、日本のを「特別攻撃」、その他の国のを「準特別攻撃」と区別しておられるが、私は日本のを「特攻兵器」、欧州諸国のを「特攻的兵器」と呼称したのである。いずれも断固たる勇氣と決意がなければ遂行できる作戦ではないが、そこには「必死」と「決死」の覚悟の差があるからである。

### 生還の方途

第二次世界大戦では、枢軸・自由両陣営とも、各種の特殊部隊が活躍した。これらの中で、いわゆる特攻・準特攻の部隊を除くと、英国のコマンドー部隊、米国のレンジャー部隊、ドイツやソ連の強襲部隊、それに日本の挺身部隊(女子挺身隊を除く。)などが有名である。このように欧米諸国も、決死の覚悟を必要とする危険な作戦を敢行したが、これら特殊部隊は、たとえ死の確率は高くとも、生還が期待できる条件のもとで行動し、また生還の意志があったことを忘れてはなら

ない。したがって、欧州諸国の特攻的兵器を用いた作戦においても、常に脱出・生還の方途が講じられていたのである。

これは至極当然の道理であって、日本海軍においても、昭和一九（一九四

四）年までは、その原則が貫かれていた。例を挙げると、昭和八年に横尾敬

義海軍退役大佐（海兵30期）が人間魚雷を考案してその採用を進言したが、

海軍はこれを問題にせず却下した。それから十年後の昭和一八年一月二

八日、九三式酸素魚雷を用いる人間魚雷の構想を仕上げた黒木・仁科両海軍

士官が上京して、その採用を血書上申したが、やはり必死の兵器であるとの理由で海軍省は許可しなかった。

しかしながら、戦局の悪化はいかんともしがたく、ついに海軍は昭和一九

年三月に「〇六兵器」と名付けて、この人間魚雷の採用に踏み切った。それ

でもなお海軍は、試作にあたって脱出装置を付加するよう条件を付した。結

局、そのような装置を施すことは不可能ということになったが、この条件の

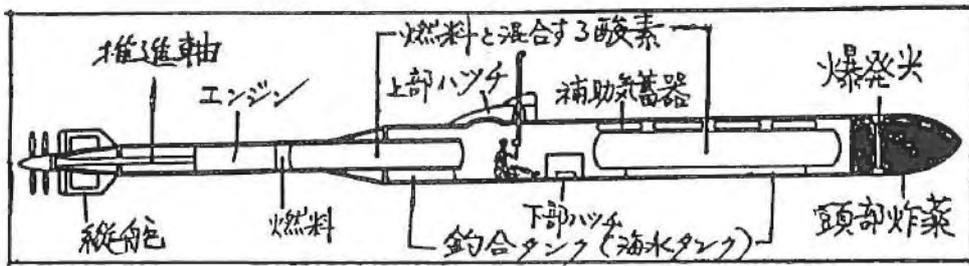
検討が試作兵器完成の七月まで延びる一因になったといわれている。

### 特攻を命じるな

このような海軍の伝統にもかかわら

ず、マリアナが陥落した昭和一九年の半ばを過ぎると「もはや体当たり消去攻撃のほかはない」という建言が、館山海軍航空隊司令の岡村基春大佐や軍艦千代田艦長の城英一郎大佐などから上申された。

軍需省航空兵器総局長官であった遠



人間魚雷回天一型。頭部炸薬1,550kg。

藤三郎陸軍中将の回想によると、昭和一九年六月二十七日、同中将は前記の岡村大佐の意見具申を、軍需省総務局長の大西瀧治郎海軍中将とともに聞いたそうである。

その大西中将は、フィリピンの第一航空艦隊司令長官に予定された昭和一九年一月五日に軍令部を訪ねて、総長の及川古志郎大將、次長の伊藤整一中將、第一部長の中沢佑少將と会談した際「もはや必死体当たり戦法をとる以外に現状を打開することは不可能と考える。軍令部の了解を求めるために参上した」と言った。

長い沈黙ののち、及川総長は「大西君、大本营も了解します。戦死者に対する処遇は十分考えましよう。しかし大西君、はっきり申し述べておくれ、決して命令はしてくれなよ」と言った。これに対して大西中将は「よくわかりました。事後のことはよろしく願います」と答えたという。（「追想海軍中将中沢佑」による。）

この軍令部総長のことは、最後の日本海軍の良識が語らせたものではあるが、当時の第一線の戦況は、そんなになまやさしいものではなかったのである。

### おわりに

私はこの「特攻随想第一話」において、日本はやがて特攻作戦のできない国になるのではなからうかと予言した。日本では「特攻」と言ってもなんのことかすらわからない者がふえているのに、外国、殊に米英では「日本の特攻作戦」に関する研究熱が依然として下火になる傾向にない。

私の知る限り、英国においては現在でも「特攻的兵器」の研究開発が、極秘裏に続けられている模様である。むしろ欧米ともコマンドーやレンジャーなどの訓練は盛んであり、このような世の中でも危険をかえりみずに挺身する冒険好きの勇士があとを断たないものである。そればかりか、現在、世界の各地でひん発するゲリラ戦に対処するには、コマンドーやレンジャーなどの訓練が必要であると強調されているらしいである。

現在の自衛隊も、世界各国の「特攻的兵器」を研究すべきであると私は信じている。いかに平和日本の自衛隊員であるとはいえ、たとえ「特攻作戦」はできなくても、「準特攻作戦」までできないと私は思いたくないのである。

（隊友会東京都支部連合会副会長）

# 「若潮の塔」慰霊大祭挙行

船舶特幹三期・①四一戦隊 渡辺 功

ルレ」という秘匿名  
を持つ肉薄攻撃艇  
(ベニヤ製・中古の  
自動車エンジン搭  
載)の艇尾に二五〇  
kgの爆雷を取付けて敵船に体当たり攻  
撃をする部隊である。

平成五年十一月二十三日、香川県小豆島の八幡山山頂に鎮座在します淵崎護国神社社前にて「若潮の塔」建立二十周年慰霊大祭が厳粛に執り行われた。戦争末期に小豆島の土庄町(当時は淵崎村)に陸軍船舶特別幹部候補生隊(通称・若潮部隊)が設置され、第一期生から第四期生まで各期約二千名が入隊し、陸軍船舶兵としての基礎教育を受けた。

第一期生は約一九〇〇名が昭和十九年四月に入隊し、八月末に卒業後、その大部分の約一七〇〇名が水上特攻隊に編成され、一一四〇名が戦死した。「人数は「ルソンの碑(いしづみ)・陸軍水上特攻隊の最期」儀同保氏著(特幹一期生・①二戦隊)による」明治初期に軍制が施行後、これほどの戦死者を出した「期」は、陸海軍を通じてない。

この特攻部隊を海上挺進戦隊と呼ばれ、隊員には、一部は全陸軍から選抜された下士官によって編成された戦隊もあったが、その多くは特幹一期生であった。一人の隊員が操縦する①(マ

元特幹一期生・海上挺進第十八戦隊  
故片桐淳一 妹 寺嶋弘子(宮城県)

## 若潮の塔建立二十周年 慰霊祭「追悼のことば」

第一期生は沖繩・台湾・比島に送られた。しかし、実際に特攻による戦死隊員は少なく、その多くは内地より南方向けに輸送船が航行中に撃沈されたり、満足の武器もなく陸上戦闘による場合が多かった。戦後、特幹一期より四期の各期生会及び関係者は「若潮会」を結成して、会員の募金によって昭和四十八年十一月二十三日、小豆島の富丘八幡神社境内に「若潮の塔」を建立した。塔の「若潮魂」の揮毫は時の田中角栄首相である。「若潮会」では五年毎に慰霊大祭を行ってきた。

平成五年十一月二十三日は二十周年大祭であった。

本年の大祭で多くの参列者の涙を誘ったのは遺族代表として仙台市より参加の寺嶋弘子さん「追悼のことば」であった。これを次に掲げる。

晩秋の瀬戸内を渡って、昨日ようやく小豆島に参りました。一度は必ず訪ねなければと思いつけて何十年にもなりました。

兄ちゃん！ あなたが昭和十九年十一月の最後の葉書で「けいさんは決戦の教壇にがんばって下さい」と書いた姉「けい」と「まだおっぱいを飲んでいけるのではないか」とからかっていた三歳の妹「康子」と三人でやって来ました。あの頃、まだ小学生だった私がせっせと書いた手紙のあて名「香川県小豆郡淵崎村」はこの島だったのですね。夕べは潮の香りにひたりながら姉

妹三人であなたを偲びました。

そして今日は「若潮の塔慰霊大祭」に参列させていただき感謝と感激で胸いっぱいです。私たちは一昨年の春までこのように立派な慰霊塔を建てていただき、懇ろにお祀りしていただいていることを全く存じませんでした。

町ご当局や地元の方々、ご無事だった戦友の皆様が二十年も前から心こめて慰霊して下さい、今日も又、わざわざご参集下さって追悼いただきましたことに厚くお礼申しあげます。

先ほど「若潮の塔」に真向い、凛々しい「特幹兵の像」に相対し、遠くありし日のあなた方の上へと思いをめぐらししました。ここに祀られた御霊は千四百余柱とのこと。一まとめに数えられてしまう千四百人余。しかし、一人ひとり異なった顔と名前を持つみんな生身の人間だったと思うとき、あなた方の無念の声がどこからともなく聞こえて来るような気がいたします。

その上、千四百余人の皆さんに連なる祖父母、父母、兄弟姉妹があることを思うとき千四百余人の何十倍もの方々の嘆きや悲しみがひたひたと身に迫るのを覚えます。

わが家にあなたの戦死公報が入ったのは昭和二十三年八月でした。19・11・1、下関付けのスタンプで最後の葉



書が家族めいめに届いてから三年十ヶ月も後の事でした。

「昭和十九年十一月十二日、十一隻の船団でマニラに向けて航行中僚船二隻が被雷したのに続き、あなたの乗った辰昭丸にも魚雷が命中、轟沈した」とのこと。四年間、武運強かれと祈り待ちつづけた家族にこうした最後の状況が知らされました。

空のお骨箱を受け取り、形ばかりの葬儀を済ませてから両親の苦悩の日々ははじまりました。父は会社づとめの朝夕に家のまわりを畠にし、荒れ地を借りて開墾したりして一家六人の食糧の自給にがんばってくれました。母は病弱な体に息子の戦死はどれ程の痛手だったか知れません。ことに「戦争は日本の敗戦で終結したこと」、「息子はまだ兵役の義務年齢でもないのに自らの志願だったこと」、「何のための死だったのか、何としてでも引き止めるべきではなかったのか」、母の想いはいつも自分を責めることに立ち返っていききました。

そして、兄がすべてを託した次男である弟が昭和五十七年に四十六歳で病死したとき、母の悲痛は頂点に達したかのようでした。兄亡きあと父母は当然次男の弟に期待をかけておりました。東京外語大への進学も、商社への

就職も喜んで自慢にもしておりました。母はこの弟の病死を「宝物を失なった」と嘆きました。弟はまた弟で、天命を悟ったベッドの上で兄のことをとどんなにか思ったのでしょうか。「戦争で死んだ人達もたくさんいたものな」と言いました。(それに比べたらまだ自分はいい)と言外に語りました。

残った子どもは私たち娘四人。子どもを全部亡くした人も、一人しかいない息子に戦死された人もいる、と私たちは母を慰めるのですが明治の女には頼れる子どもはやはり息子、家を守ってくれるのは男であると思えなかったのでしょうか。母は二年前、九十三歳で亡くなりました。教員を退職した姉が最後まで看取りました。

その頃、私たちは兄の戦隊は海上挺進隊と呼ばれ水上特攻兵だったということを知りました。①艇による体当り的作戦の要員だったと知ったとき、兄の遺した言葉「船舶兵は肉弾です。水漬く屍と散る肉弾です」の意味を真に理解することができました。なぜもつと早く分らなかったのか、弟が存命であったなら厚生省でも、どこへでも出向いて真実を追求してくれたのではなかったのかと悔やみました。

一方では「兄達を戦争で奪われた妹

たちの会」、亡き推理作家仁木悦子先生の提唱で始められた「かがり火の会」に属する私はたくさんの兄弟の中にいつ、どこで戦死したのか不明の方もあり、兄の場合は最後の状況が知らされただけでも良いのだと納得もしておりました。

今年の夏、元中隊長の久保三郎様を介して秋田県の須藤輝雄様から辰昭丸と①艇の絵の写真を頂きました。爆雷をうしろに積んだ艇に鉄兜の兵士の顔が一つ白波をけたてて進んで行く絵です。たった一人でどんな想いだったでしょうか。私は今、兄が八月末の数日帰郷した時のことを思い出します。自分の勉強机に向かって裸になって腰かけていた兄は私を呼んで、背中にできたタムシにタムシチンキを塗らせました。あの時の兄は胸中に語り得ないどれ程の重い事実を秘していたのか、兄だけではない千四百余人ものまだ少年の佛のこる兵士たちが命じられた任務の重さ、何の疑いもなくすべてを受容して果敢に立ち向かったそのけなげさに胸ふさがれるばかりです。

また、昨年は兄達の第十八戦隊二十八名分の遺書がみつかり、中岡会長様、田村様、久保様のご尽力で遺族に返していただきました。戦後四十八年経った今日、これらの遺書の一言一句

を理解できるのは年老いた者だけとなりました。兄の遺書の「不忠を恥ずる」、「うつしみを捨てて大義に生きる」などは当時の国民大多數の信条とされていきました。しかし、学校教育の後半を戦後の民主主義のなかで過ごし、ヒューマニズムの精神を学んだ私には兄の必死の言葉もかなしいことに空疎なものにしか聞こえません。こうした遺書は人間の本然の心をすっかり歪められ、本音を言えなかった時代の証言となり得るものです。

兄ちゃん！日本の国は戦後誰も想像し得なかった繁栄と発展を遂げました。人間はみな平等のもとに教育、信条、信教すべて自由な世となりました。自由に考え、自由に語り、行動し、生を全うできる幸せを得ています。超国家主義の犠牲となったあなた方は今こそ「本当は死にたくなかった、生きていたかった」と海の底から、異国の山野から叫んで下さい。一度でいいから本音を語って下さい。

「死んでも生まれ変わることが出来る」とあなたは言いました。本当に十八歳のままの顔で私たちの胸のなかに生き続けています。

永遠の生命を得ている千四百余人の御霊よ、日本がふたたび過去のあやまちをくり返すことのないよう、いつい

つまでもお守り下さい。そして、私たちも世界中の誰もが戦争で生命を奪われることのない平和が訪れ、それが永久に続くよう努力することを誓って「追悼のことば」といたします。

平成五年十一月二十三日

(注) 戦死された片桐淳一氏は、大正

十五年出生、宮城県宮城郡松島町

出身、昭和十九年三月、宮城県仙

台第一中学校卒業直後に船舶兵特

別幹部候補生隊に第一期生として

入隊。幸之浦の第十教育隊で①訓

練を受け、第十八戦隊に編成さ

れ、辰昭(たつあき)丸にてマニ

ラ向け航行中、濟州島南西で米潜

の攻撃を受け、昭和十九年十一月

十二日戦死。軍曹。辰昭丸に乗船

していた第十八戦隊第一中隊は、向田貞一中隊長以下三十六名を含め、乗船していた六百六十名が戦死。

て、復員された。第十八戦隊員の

遺書発見、遺族への返還に尽力さ

れた。また、「追悼のことば」を

述べた寺嶋弘子さんは淳一氏のす

ぐ下の妹で、当時、国民学校六年

生。宮城県仙台市在住。元保育所

長。姉の片桐けいさんは宮城郡松

島町在住。元中学教員。

「若潮の塔建立二十周年」吟詠

作 秋元 邦壮

(読み方)

碧海洋洋波亦平 碧海(へきかい)洋

洋として波また平ら

なり

八幡山聳若潮塔 八幡山に聳ゆる若潮の

塔 寒霞紅楓清涼秋 寒霞の紅楓(こうふ

う)清涼の秋

不滅盡忠傳萬古 不滅の盡忠(じんち

ゆう)萬古(ばんこ)

に傳う

(注) 平成五年十一月二十三日、八

### 義烈空挺隊員の遺書

とはにまもらん大  
和島根を  
飯田軍曹

会員 窪 川 敏 郎

お母さん  
不孝者でした

自分で書いた走り書きのメモに「平

成二年五月末、義烈空挺隊員飯田軍曹

のご遺族・初老婦人が拙宅を初訪問さ

れし折、遺書を見せて頂く」とある

が、残念なことに来訪者の住所も氏名

も記入していない。5月25日の山梨県傷

痕軍人会総会終了直後にフロントの近

くで見知らぬ初老婦人から「あなたは

沖繩特攻の戦傷者だそうですが、…」

と声をかけられたのを記憶している。

「私の兄は義烈空挺隊で戦死です」と

の話に私は度肝を抜かれた。長野県出

身で富士吉田市に住むという。どうし

て山傷の総会に出席したのか、別に質

問もしなかった。

数日後、突然の来訪であった。家内

が入院中なので私は慌ててお茶を出し

た。半紙大の白紙に毛筆で書かれた遺

書を差し出された。

帰らじとかねて覚悟の特攻か

名残りをとどむ筆の跡なり

昭和二十年一月十四日 飯田秀臣

辞世

華と咲き南の空に天翔けて

とほにまもらん大  
和島根を  
飯田軍曹

二首の歌の下に：  
お許し下さい  
元気で征きます

掌に墨を塗ったであろう手型を押し  
て母に送る―、この悲壮感に、私は今  
も涙ぐんでしまう。お話のメモをとる  
右手が震えた。松本50聯隊(歩兵)S  
14、15年ごろ、所沢：航士？ 宮崎↓  
仏印―スマトラ・パレンバン(空挺  
隊)20・5・24熊本・健軍飛行場、知  
覧、特攻平和会館：とメモはここで  
終わっている。

秋霜烈日初冬の梅の香と消ゆるとも

九段の桜と千代に咲くらん

三浦曹長

堪忍袋の緒を切って

征くぞサイパン殴り込み

谷川曹長

生死何をか論ぜんや

唯念ずるは任務完遂

菅原軍曹

大和桜散り行く時は君が為

何をかなさんなさで止むべき

諸井曹長

君のため只一すじに征く道は

清く明るくたのしくありけり

高橋伍長

秋は来る関ヶ原の一戦か

我らの特攻戦勝の端緒を開く

星 軍曹

誰がやるかがやるでははじまらぬ

我魁けて国をまもらん

木谷伍長

私は今朝あらためて「陸軍航空の鎮魂」総集編を開いてみた。第五章、突入特別攻撃隊のラストに義烈空挺隊八十八名の一覧表を確認のため再読した。三浦歳一郎曹長以下高橋房治伍長まで八名も確認できた。戦死日は20・6・15である。知覚特攻会館の遺影コーナーと宮越春雄准尉の出撃前の乾盃(5・24)の写真も出ている。

私の特攻出撃は5・26で、菅原軍司令官は健軍飛行場での義烈空挺隊出撃のため知覧へは見えなかった。特攻出撃の失敗、入院。後遺症のため、今も室内でも厚い防寒帽を被っている。外は雪の原で風がないている。八人の遺書を集めて総理大臣に一読ねがいたい

——侵略戦争の証言であるか否か——  
を訴えたい気持ちで特攻戦傷者はペンを執ったのである。



「挺身殉国」と書き残す奥山隊長

### 憂 国 詩

木住野 哲 男

一、大詔を拝して  
かの聖戦は 終りたり  
回顧す 過ぎし星霜  
先人の足跡を  
悪しざまに言うは  
愚かなり  
戦争は 忌むべきもの  
敢えて 多言を要せず  
二、なれど  
民族には 自存自衛の  
強固なる 意志あり  
国家存亡の 危機に瀕せば

国の定むるところ  
決然立ちて 銃とるは  
祖国への忠誠にして  
いかならむ民族といへど

そは 愛国の至情ならん

三、青史を繰りて

古き地球儀を見ん

アジアは総て 欧米の支配たり

タイ ビルマ ラオス カンボジア  
ベトナム

印度又言ふに及ばず

南太平洋諸島 七つの海は

みなユニオン ジャックの旗

翻るところなり

四、抗すれば攻す

生殺与奪は 戦場の常

その正 否を論ずるの術なし

「敗者の下ぐる頭は 蹂躪せられ

勝者の一点燈は 美德と稱せらるるに

相似たり

東京裁判史観をもって

わが戦史を弾劾

報復となすは 卑劣なり

戦時法規 無視の

原爆 シベリア抑留の残虐を

いかにとなす

五、戦火治まりて四十八年

ひたすら平身 自虐

敵国戦士の 墓碑にぬかずきて

罪禍を 殉国三〇万の将兵に科し

侵略の言辞を弄して  
国事 靖国に及ばざるは  
慚愧に耐えず  
いつの日か

英霊の 怒りあるを知るべし

六、アジア開放の 戦火遠去りて

大東亜共栄圏は ここに拓ける

黎明と共 歡喜あふるるは

東南アジアの国々

昭和は偉なり

恩威 及ばざる処なし四海

先帝の統しめす方

国たみ挙りて

この大戦に殉ぜり

七、今ぞ

世界の指標たり

平和国家への巨歩

変節なき 日本精神を復興して

国家盤石の 固めとなさん

英霊 乞ひ願わくば

冥せられよ

我ら 生ある限り

胸はりて み霊守り

祖国を愛さん

平成五年八月十五日記

### 第27回陸軍海上挺進戦隊戦没者慰霊祭

#### (兼)若潮会 陸軍関係者 関東支部総会

船舶特攻各期生会

菊花薫る平成5年11月7日、関東地区のご遺族・戦友七〇余名が靖国神社参集殿に集合。全員昇殿ののち浜野支部長(特幹4期生)ご本殿前にて謹んで左記の祭文を奏上す

#### 祭文

本日、若潮会関東支部第二十七回総会を開催するに当たり、先の大戦に散華され、靖国のみ社に神鎮まります陸軍特別幹部候補生、海上挺進戦隊員、並びに関係船舶部隊員の御霊に謹んで哀悼の言葉を捧げます。

大東亜戦争開戦初頭の陸に海に華々しい戦果を挙げた陸海軍は、長期化した戦争により人員の消耗、特に著しく減耗した初級幹部を養成するために陸軍に新設された船舶特別幹部候補生の募集には全国津々浦々から、愛国の至情に燃える多数の青少年が受験し、合格の栄冠を得た中から、ペンを捨て、学窓と家郷を後にし、瀬戸内海小豆島に設立された「船舶特別幹部候補生隊」に入隊、陸軍初級幹部としての輝

かしい道を歩まれて厳しい訓練に励まれたものです。

既に、戦況は我を誇る連合軍の怒濤の進攻に対して

陸海空の総力を挙げた特別攻撃隊が敢行され船舶部隊にも特別攻撃隊の編成が下命され、船舶特別幹部候補生を主体として、全陸軍の精鋭の中から選抜された将校、下士官を以て「海上挺進戦隊」が編成され、フィリッピン、台湾、沖縄の前線基地に雄々しく鹿島立ちして征きました。

あなた方は迫り来る連合軍の怒濤の進攻に対して鬼神も泣かせる肉弾攻撃により多大の戦果を挙げられ敵の心胆を寒からしめました。志に反し異境の地において思わざる病魔に倒れ無念の最後を遂げられた方々もありました。その青春を祖国防衛のさきがけとして国難に殉じられました。

後に続く為の訓練中の隊員にも本土空襲による戦死者、殉職者の多数を数えるに至りました。

更に、広島に投下された原子爆弾の奇禍に遭遇し、今もその後遺症に悩む会員がおります。

終戦の天命が発せられ、廃墟と化し

た戦後の日本はあなた方の尊い青春をかけた犠牲に護られながら、多くの国民の努力により不死鳥のように立ち直り今や世界に類を見ない経済大国として繁栄と発展を遂げることが出来ました。

戦後の光陰流れて四十八星霜、本日、ここにあなた方の御霊をお慰めすべくご遺族、先輩、同僚が在りし日を偲び、過ぎ去りし思出に神前に相寄り、相集いました。

幽明、境を異にするとは申せ、天翔けり来給い共に肩を組み膝をつきあわせ、心おきない時を語り合いたく思います。

流れ去った歳月は、戦争を知らない世代に移り変わり、歴史の中でほんの一駒に過ぎない我々の部隊は大きな波の中に忘れ去ろうとしています。

私たちは、歴史の語り部として、あなた方の勲功を永久に語り継いで行くことが、命永らえた者の責務であると信じて居ります。

在天の英霊には、この国と国民の上に暖かいご加護をたれ給うとともに、とこしえに安らげく神鎮まりますことを、祈念してお別れの言葉といたします。

平成五月十一日

若潮会関東支部長 浜野 明

続いて代表五人がそろって玉串を捧げ一同拝礼して英霊に敬意を表し、それぞれそのご冥福をお祈りした。

式後、会場を九段会館に移し地階「さくら」の間で正午から総会に入った。

あらためて物故者への慰霊の黙禱を捧げ、定例の支部長挨拶、定例の議事を進め、あらたに特攻顕彰会の募金について若潮会(全国)一括出資の件と、靖国神社(みたま祭)献灯を各期生会の分担についての議題が出され、活発な意見の後それぞれ承認された。

懇親会に移り、各期ごと話がはずみ懇談の輪を広げ、再会を約し、軍歌「船舶隊の歌」で会をしめくくった。

今回は必ず参加し豊富な智識を披露し、毎回あたらしい情報を伝えてくれた齊藤義雄顧問が体調をくずされ、又皆本義博氏(3戦)・永井一氏(2期)両役員が欠席されたのは残念だった。

三期 加藤 貞夫



## 収 支 計 算 書

平成5年11月18日から平成5年12月31日まで

(設立初年度)

(単位：円)

科 目	予算額	決算額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 年会費収入	0	54,000	△ 54,000	
2 基本財産運用利息収入	750,000	159,282	590,718	
3 特別会費収入	0	9,000	△ 9,000	
4 寄附金収入	46,711,041	6,972,000	39,739,041	
5 出版事業収入	380,000	69,600	310,400	
6 雑 収 入	0	59,961	△ 59,961	
当初収入合計 (A)	47,841,041	7,323,843	40,517,198	
7 特攻隊慰霊顕彰会から受入れ		160,301,996		
収入合計 (B)	47,841,041	167,625,839	△119,801,218	
II 支出の部				
1 管 理 費				
人 件 費	1,000,000	668,690	331,310	
旅費交通費	25,000	24,900	100	
通 信 費	25,000	31,979	△ 6,979	
会 議 費	300,000	36,339	263,661	
事務所経費	150,000	100,000	50,000	
消耗品雑費	50,000	228,191	△ 178,191	
予 備 費	50,000	0	50,000	
2 事 業 費				
慰霊祭等事業費	3,600,000	0	3,600,000	
特攻隊史実調査研究費	100,000	0	100,000	
特攻隊資料収集費	300,000	0	300,000	
出版事業費	1,500,000	729,854	770,146	
予 備 費	200,000	0	200,000	
当期支出合計 (C)	7,300,000	1,819,953	5,480,047	
当期収支差額 (A)-(C)	40,541,041	5,503,890	35,037,151	
3 貯蔵品支出額		1,492,000		
4 その他固定資産支出額		2,354,793		
5 基本財産繰入額		100,000,000		
支出合計 (D)		105,666,746		
収支合計 (B)-(D)		61,959,093		
時期繰越収支差額 (B)-(C)	40,541,041	61,959,093	△21,418,052	

## 貸 借 対 照 表

平成5年12月31日現在

(設立初年度)

(単位:円)

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金	59,109	
普通預金	3,791,748	
定期預金	58,000,000	
郵便振替	282,384	
貯蔵品(特別攻撃隊誌)	1,478,000	
流動資産合計		63,611,241
2 固定資産		
(1) 基本財産		
定期預金	100,000,000	
基本財産合計	100,000,000	
(2) その他の固定資産		
什器備品	962,725	
電話加入権	149,968	
繰延資産	1,242,100	
その他の固定資産合計	2,354,793	
固定資産合計		102,354,793
資 産 合 計		165,966,034
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金	157,728	
前受金	14,000	
預り金	2,420	
流動負債合計		174,148
2 固定負債		0
負債合計		174,148
III 正味財産の部		
正味財産		165,791,886
(うち基本財産)		(100,000,000)
(うち当期正味財産増加額)		(165,791,886)
負債及び正味財産合計		165,966,034

## 財 産 目 録

平成 5 年 12 月 31 日 現在

( 単 位 : 円 )

科 目	金 額		
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金			
現金	59,109		
普通預金	3,791,748		
(第一勧業銀行市ヶ谷支店)	(1,604,748)		
(富士銀行虎ノ門支店)	(1,450,666)		
(中央信託銀行虎ノ門支店)	(15,000,000)		
定期預金	58,000,000		
(第一勧業銀行市ヶ谷支店)	(43,000,000)		
(中央信託銀行虎ノ門支店)	(15,000,000)		
郵便振替(東京4-59580)	282,384		
貯蔵品(特別攻撃隊誌×739冊)	1,478,000		
流動資産合計		63,611,241	
2 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金(中央信託銀行虎ノ門支店)	100,000,000		
基本財産合計	100,000,000		
(2) その他の固定資産			
コンピュータ機器	509,257		
電話機器	453,468		
電話加入権	149,968		
プログラミング	1,242,100		
その他の固定資産合計	2,354,793		
固定資産合計		102,354,793	
資産合計			165,966,034
II 負債の部			
1 流動負債			
未払金 電話機器等(NTT)	157,728		
前受け金 平成6年度の年会費	14,000		
預り金 職員に対する源泉所得税	2,420		
流動負債合計		174,148	
2 固定負債	0		
固定負債合計		0	
負債合計			174,148
正味財産			165,791,886

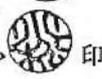
(附)特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成5年度の計算書類について監査した結果適正であることを認めます。

平成6年2月26日

監 事

岡田輝彦 

監 事

小松利光 

# 追悼式を何故千鳥ヶ淵墓苑で

当協会理事長 最上貞雄

財団設立を記念して去る3月28日、全国特攻隊戦没者追悼式を千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて執り行いました。

これら戦死者に対する慰霊行事は英霊が再会を誓い、今神鎮まります靖国の社頭にて行うべきが当然であります。特攻隊の慰霊祭も20年来靖國神社で執り行って参りました。

然し今回は財団設立を記念しての追悼式です。高松宮妃殿下、三笠宮崇仁親王殿下のご台臨を仰ぎ、内閣総理大臣、関係各大臣、中曽根、竹下前総理を始め国会議員、各都道府県知事等多数の来賓をお招きし、特に国防の重責を担う自衛隊の方々にも是非参拝をして頂きたい。又NHKを始め各報道機関にも協力方をお願いしました。

真に残念で憤慨に耐えないところで、現状は靖國神社では出来ませんが、

一日も早く、天皇陛下のご親拝を仰ぎ、自衛隊の部隊参拝も出来るようになることを祈ってやみません。

そこで何処か場所をお借りして、無宗教方式で追悼式を行うことにしました。他の場所をお借りするとすると、最も相応しい処として、千鳥ヶ淵墓苑を選んだ次第です。

そのかわり、墓前に松の白木に墨痕鮮やかに「特攻隊戦没者之霊位」と書し、菊の花で裾を飾り、英霊のみ魂をここにお迎えし追悼式を行いました。

特攻隊と言うと航空特攻だけを考えられる方が多いのですが、義烈空挺隊を始め、震洋等全特攻戦没者の半数近くは陸上で戦死されているのです。靖國神社以外でお借りする場所として最も相応しいのは、千鳥ヶ淵と考えた次第で、何卒ご理解を賜はりたい。

## ◇ 財団基金の募金

当財団は基本財産一億円で取敢ず設立が認可されましたが、三億円まで増額せねばなりません。左記により募金を致しておりますので、ご協力の程お願い申し上げます。

一、個人 一口 壹万円

二、法人、団体等 一口 拾万円  
何れも一口以上を前記郵便振替にてお振込み下さい。

## ◇ 年会費納入のお願い

平成6年度の会費を未だ納めておられない方は郵便振替にて納入して下さい。

年会費 二、〇〇〇円

口座名 財団特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会

口座番号 東京 四一五九五八〇

新規入会希望の方は氏名、住所、電話番号、職業、出身期別等を右振替用紙にご記入の上ご送金下さい。今後特攻隊慰霊財団(略称)の会報をお送り致します。

## 元旦正子の

### 靖國神社初詣

往く年来る年百八の煩惱渦巻く 現世に仰ぐ九段の大鳥居心ぞ通う この宮居平成の御代 六年を告ぐる太鼓はドウと鳴り 肅然と進む 人の群 夜空に浮かぶ 宮柱 ぬばたまの内奥宮の ほんかにゆらぐ灯は 聞召されしか亡き友に 捧ぐ老兵の 拍手を 年々歳々人替れども 変らぬものはこの宮に 斎き祀れる 神々の 国に殉ぜしこゝろざし

